

令和7年度「とちぎっ子学習状況調査」の結果概要について

宇都宮市立若松原中学校

家庭や地域から「信頼される学校」であるためには、学校の状況や生徒の実態を保護者や地域の方々に十分御理解いただく必要があります。その上で、家庭や地域と一体となって生徒を育てることが大切であると考えています。

こうした考えから、令和7年度「とちぎっ子学習状況調査」における本校生徒の学力や学習状況の概要について、以下のとおり公表します。

また、調査結果は、学習指導の工夫・改善に役立てることが大切ですので、調査結果の分析、指導の改善策などを併せて掲載します。

【調査の概要】

1 目的

本県児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析し、児童生徒一人一人の課題を明確にするとともに、各学校が組織的に学習指導における検証改善サイクルの構築・運用に取り組むことにより、本県児童生徒の学力向上に資する。

2 調査期日

令和7年4月17日(木)

3 調査対象

中学校 第2学年 (国語, 社会, 数学, 理科, 英語, 質問紙)

4 本校の実施状況

第2学年	国語 179人	社会 179人	数学 179人
	理科 179人	英語 179人	

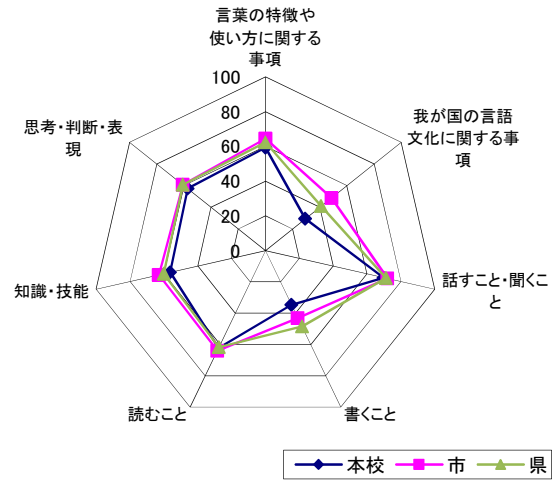
5 留意事項

- (1) 本調査は、対象となる学年、実施教科が限られていることや、必ずしも学習指導要領全体を網羅するものでないことなどから、本調査の結果については、生徒が身に付けるべき学力の特定の一部であることに留意することが必要となる。
- (2) 本校の傾向等を分かりやすく示すために分類・区分別の平均正答率などを公表した。
- (3) 平均正答率の数値は調査結果のすべてを表すものではないため、「本年度の状況」、「今後の指導の重点」などの分析を併せて記載した。

宇都宮市立若松原中学校 第2学年【国語】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	言葉の特徴や使い方にに関する事項	59.3	64.5	62.3
	我が国の言語文化に関する事項	29.4	48.7	41.1
	話すこと・聞くこと	69.9	72.1	71.2
	書くこと	34.7	43.1	48.5
	読むこと	62.2	63.9	61.8
観点	知識・技能	56.3	62.9	60.1
	思考・判断・表現	57.3	60.8	60.8



★指導の工夫と改善

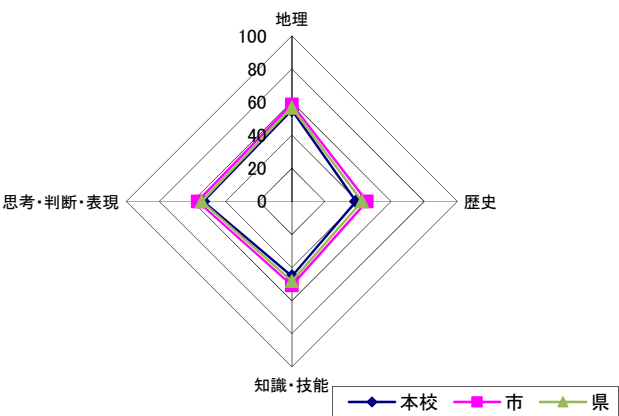
○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
言葉の特徴や使い方にに関する事項	正答率は、市平均を5.2ポイント、県平均を3.0ポイント下回った。 ○漢字の読みや文法に関する問題の正答率は比較的高い。 ●漢字の書き取りや敬語の問題は正答率が低い。	・漢字の書き取りは本校の課題である。全学年で漢字テストを実施し、新出漢字習得への意識付けを行っているが、今後も継続して取り組んでいく。また、ひらがなを多用する生徒が多いので、日常においても漢字を適切に使用するよう指導し、新出漢字のみならず小学校での既習漢字についても定着を図っていく。
我が国の言語文化に関する事項	正答率は、市平均より19.3ポイント、県平均より11.7ポイントと、他の項目と比べ大きく下回った。 ●歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す問題の正答率が低い。	・歴史的仮名遣いに関しては、年間を通しての継続的な学習が困難であるため、古典の学習の際に確認テストを行うなどして定着を図っていく。
話すこと・聞くこと	正答率は、市平均より2.2ポイント、県平均より1.3ポイント下回った。 ○話し合いの内容を聞き取り、話者の話し方の特徴や司会の進め方をとらえる問題は、正答率が高い。 ●条件に従って話し合いのまとめを記述する問題は、正答率が低く、無解答率も高くなっている。	・聞き取りテストを定期的に行っていることで、話し合いの内容に対する理解が高まっていると考えられる。今後も継続して行うとともに、聞き取りメモを取る際に、結論を集約して文章化する指導も併せて行っていく。
書くこと	正答率は、市平均より8.4ポイント、県平均より13.8ポイント下回った。 ●①～④のいずれの条件においても正答率が低いが、無解答率が高いことが大きく影響していると考えられる。	・書くことに対する苦手意識や抵抗感が大きい生徒が非常に多い。授業において、メモをヒントに文章にまとめる、キーワードを関連付けながら文章を作る、文型のテンプレートを利用して文を作る等の活動を取り入れることで、表現力を高めていく。
読むこと	正答率は、市平均より1.7ポイント下回ったが、県平均を0.4ポイント上回った。 ○物語においては、すべての問題で正答率が市平均・県平均を上回り、無解答率も低くなっている。 ●論説文の読解については、市平均・県平均を下回り、苦手意識が強いことがうかがえる。とくに、文章を読み込まなければ解けない問題や、文書の主旨を踏まえて考える問題の正答率が低くなっている。	・文章を読む際に、まずは文章全体として何を言いたいのかを巨視的にとらえさせた上で、細部の内容に踏み込むように指導していく。その過程で、文どうしの関係をとらえたり、表現方法に注目させたりすることで、より正確な読み取りへとつなげていく。

宇都宮市立若松原中学校 第2学年【社会】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	地理	55.1	58.7	56.6
	歴史	38.8	45.4	42.4
観点	知識・技能	45.2	50.7	48.2
	思考・判断・表現	53.3	56.9	54.4



★指導の工夫と改善

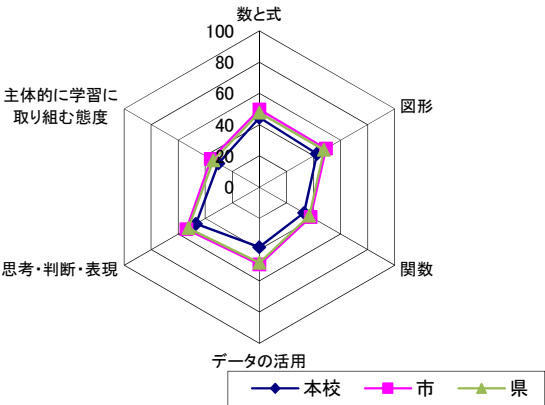
○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
地理	・知識・技能、思考・判断・表現のいずれの観点についても、正答率が県・市の平均を下回っている。 ○日本の領域に関する問題や東南アジアに関する統計資料の読みとりに関する問題の正答率が高く、県平均・市平均を上回っている。 ●世界地図から大陸と海洋を読み取る問題、及びいくつかの特徴の異なる世界地図を利用して解く問題の正答率が低く、1年次の学習内容の定着に課題が見られる。 ●グラフの特徴やグラフから推測されることを文章でまとめる問題は、とくに正答率が低い。また、事象を説明するときにはどのような資料を用いればよいかという問題も、正答率が低くなっている。	・なじみの薄い資料を目にしたときに、それが何を表す資料なのか、そしてどう読み取ればよいかを理解させていく必要がある。授業においても、資料やグラフの読み取り方について丁寧に説明するとともに、実際に作図をしたり、そこから読み取れることや推測できることを文章でまとめさせていったりする活動を積極的に取り入れていく。 ・思考力・判断力・表現力の育成にあたって、単元振り返りシートを活用するとともに、話し合い活動において、考察する上での視点を明確に示し、考察した結果を発表したり、生徒どうしで確認したりする活動を取り入れる。 ・今後の学習を進めていく上で、1年次の学習内容を振り返る機会を設けていくことで、知識の更なる定着を図っていく。
歴史	・知識・技能、思考・判断・表現のいずれの観点についても、正答率が県・市の平均を下回っている。 ○弥生時代の集落に関する情報から、弥生時代の社会にの特徴を読み取り、文章で表現する問題の正答率は高くなっている。 ●中世の日本に関する問題の正答率が全般的に低く、1学年後半の学習内容が定着していないことがわかる。また、提示された資料がどのような歴史的事実と関連しているのか、理解が不十分であるといえる。	・基礎的な知識(とくに中世以降)の定着を図っていくことが最大の課題である。まずは、「どのような世の中だったのか」など歴史の大きな流れをとらえさせた上で、個々の事象や人物についての理解を図っていく。その際、資料を積極的に活用し、資料の着眼点や読み取り方を明確にした上で、推測される時代背景についてもとらえさせていく。 ・思考力・判断力・表現力の育成にあたって、単元振り返りシートを有効活用する。「なぜ～なのか」という単元を貫く問いに対して、生徒が自分の言葉で答を論述し、教師が評価する。このプロセスを継続していくことで、より深い思考を促していく。

宇都宮市立若松原中学校 第2学年【数学】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	数と式	44.4	49.7	47.6
	図形	42.5	49.2	47.7
	関数	33.1	38.0	36.8
	データの活用	38.4	49.6	48.5
観点	知識・技能	46.9	54.0	52.5
	思考・判断・表現	30.3	35.8	34.1



★指導の工夫と改善

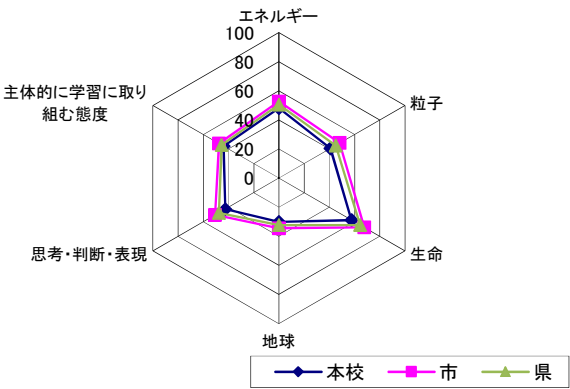
○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
数と式	正答率は、市平均よりも5.3ポイント、県平均よりも3.2ポイント下回っている。 ○最低気温の図の読み取りに関して、その性質を理解を問う問題については、正答率が市の平均を上回っている。 ●2年生の学習内容である方程式の計算や不等式の性質に関する問題の正答率が低い。 ●リード文が長い問題や解答する上で条件がつく問題については、正答率が低く、無解答率も高い傾向が見られる。	・計算問題は、授業中だけでなく、家庭学習での復習やワークブックの課題で継続的に取り組ませることで定着を図る。とくに方程式や不等式といった、2年生の学習内容の習得に重点を置く。 ・文章問題において、「文章から必要な情報を読み取ること」「読み取った情報をもとに立式すること」を中心に授業を展開する。また、類題を与え、繰り返し解かせることで定着を図っていく。
図形	正答率は、市平均よりも6.7ポイント、県平均よりも5.2ポイント下回っている。 ○おうぎ形と半径が等しい円の面積を求める問題では、正答率が比較的高い。 ○作図に関する問題は、正答率が比較的高い。 ●立方体から三角錐を切り取った立体の体積を求める問題は正答率が特に低く、市や県の平均を大幅に下回っている。	・平面図形、空間図形のいずれにおいても、実際の立体や視聴覚教材といった具体物を利用しながら、図形の性質を理解させる。 ・面積や体積を求める問題は、教科書やワークブック等の類題を繰り返し解かせることで定着を図る。
関数	正答率は、市平均よりも4.9ポイント、県平均よりも3.7ポイント下回っている。 ○2つの三角形の面積の差を、グラフの読み取りから求める問題では、正答率が市と県の平均を上回っている。 ●リード文を読むことによって状況を理解しなければ解けない問題は、正答率が低くなっており、無解答率も高くなっている。	・関数の基礎として、「表をかく・埋める」「式を求める・式で表す」「グラフをかく」ができるように、授業等においても継続的に指導していく。 ・日常生活の中で関数に関連のある題材を用意し、生徒の興味・関心を高めていくとともに、問題演習を継続的にやっていく。
データの活用	正答率は、市平均よりも11.2ポイント、県平均よりも10.1ポイント下回っている。 ●いずれの問題においても、正答率が市平均・県平均を下回っている。度数分布表・ヒストグラム等の特徴及び「累積度数」「相対度数」といった語句の理解が不十分であると考えられる。	・度数分布表・ヒストグラムの特徴や「相対度数」「累積度数」「代表値」といった基礎的な用語の意味をしっかりと理解させる。 ・データの処理や度数分布表の作成においては、グループ活動を取り入れ、協力しながら学び合う学習を行う。

宇都宮市立若松原中学校 第2学年【理科】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	エネルギー	48.2	52.7	50.5
	粒子	40.8	48.3	44.9
	生命	57.5	67.6	64.4
	地球	30.1	34.4	32.3
観点	知識・技能	42.6	50.7	47.6
	思考・判断・表現	43.9	47.6	45.6



★指導の工夫と改善

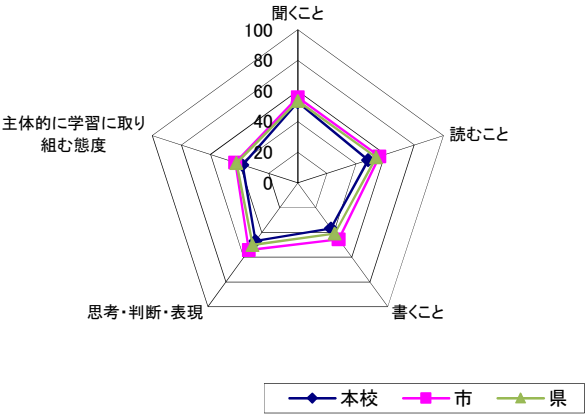
○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
エネルギー	正答率は、市平均を4.5ポイント、県平均を2.3ポイント下回っている。 ●虫眼鏡によって結ばれる虚像を作図する問題では、正答率が県平均・市平均を大幅に下回っている。 ●ばねの先につけたおもりの重力とつり合っている力について、正しく表している図を選択する問題は、県平均・市平均を大幅に下回っている。	・光や力の作図に関する定着度が低く、無解答率も高い。今後も実験などの際に作図する機会を多く設け、教師が丁寧に添削していくとともに、ポイントをしっかり説明することで「描くだけ」にならないよう理解を促していく。
粒子	正答率は、市平均を7.5ポイント、県平均を4.1ポイント下回っている。 ○二酸化炭素の発生方法と検出方法を問う問題の正答率は比較的高い。 ●「蒸留」「状態変化」といった用語を問う問題や、食塩の水溶液のモデルを選ぶ問題などの正答率が低く、基礎的・基本的な内容の定着に課題が見られる。	・「粒子」に関する基本的な概念をつかめていない傾向が見られる。授業において、インターネットのシミュレータなどを活用したり、実験実習の際に粒子モデルを活用したりすることで、「粒子」のイメージをつかませていく。 ・授業において、「ドライアイスでシャボン玉が浮き上がる」「みりんのアルコールをとばす」といった日常的な題材を数多く取り上げることで、理科学習の意義を見いださせていく。 ・濃度の計算は、類似の問題を多く解かせることで、定着を図っていく。
生命	正答率は、市平均を10.1ポイント、県平均を6.9ポイント下回っている。 ○脊椎動物の分類に関する問題は、比較的正答率が高い。 ●植物のつくりと分類、動物の分類いずれにおいても正答率が低く、基礎的な知識が定着していないことが読み取れる。	・植物のつくりと分類に関しては、資料の読み取りにつまづきがあることが考えられる。授業において、基礎的な知識を絵や図の形でまとめることで、知識を整理する習慣を身に付けさせる。 ・動物の分類についても、分類の観点を明確に示した上で、表の形でまとめさせる。
地球	正答率は、市平均を4.3ポイント、県平均を2.2ポイント下回っている。 ○3地点の柱状図の様子から地層の傾斜を選ぶ問題は、県平均・市平均ともに上回っている。 ●新生代の示準化石、火成岩の特徴、初期微動継続時間など、基礎的な知識を問う問題の正答率が低い。	・授業において実際の岩石を提示したり、県内の実際の地層の画像を活用したりすることで、生徒の興味を喚起し、基礎的・基本的な内容の更なる定着を図っていく。

宇都宮市立若松原中学校 第2学年【英語】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	聞くこと	52.6	55.8	53.5
	読むこと	48.3	56.0	53.8
	書くこと	36.7	45.6	40.9
観点	知識・技能	47.0	54.3	50.2
	思考・判断・表現	37.9	42.9	42.1



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
聞くこと	正答率は、市平均を3.2ポイント、県平均を0.9ポイント下回っている。 ○●正答率が市平均・県平均を上回っている問題、下回っている問題が混在しており、話の内容によって聞き取ることができたりできなかったりしていることがわかる。	・小学校からリスニングを積み重ねてきた成果も表れている。今後も授業において教師やALTの英語での話を進んで聞き取るよう継続的に指導するとともに、より細かく複雑な情報が含まれる話も、注意深く聞き取る活動を取り入れ、生徒の聞く力を伸ばしていく。
読むこと	正答率は、市平均を7.7ポイント、県平均を5.5ポイント下回っている。 ●会話文の内容から該当するものを表から選ぶ問題、英文やスピーチの原稿を読んでその主旨をとらえる問題のいずれも正答率が低く、英文を読む力が十分に身に付いていないと言える。	・授業においてさまざまな英文を読む機会を設け、その文がどのような内容で、どのようなことが言いたいのかを考えさせる習慣を身に付けさせる。また、文章を読む上で、語彙と文法に関する知識の定着に粘り強く取り組んでいく。
書くこと	正答率は、市平均を8.9ポイント、県平均を4.2ポイント下回っている。 ●対話文の空欄を埋めたり、適切な形に変えたりする問題、語を並べ替えて文をつくる問題、情報を英文で表現する問題、いずれも正答率が低く、書く力が十分に身に付いていないと言える。	・授業において書く活動を積極的に取り入れていくとともに、教師が添削を丁寧に行うことで、正確な文章を書けるように指導していく。また、書くために必要となる語彙と文法に関する知識の定着に粘り強く取り組み、既習内容の復習を行っていく。

宇都宮市立若松原中学校 第2学年 生徒質問調査

★傾向と今後の指導上の工夫

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

○●「勉強していて『おもしろい』『楽しい』と感じることがある」の肯定的割合は76.5%で、県平均(73.3%)を上回っている。学習面においては、「話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる。」「自分の考えや意見を発表することは得意である」「わからない問題は、教師に聞いて解決している」の肯定的割合が高い一方で、「自分の力で問題を解決しようとしている」「難しい課題になると意欲が高まる」の割合は低くなっており、課題に粘り強く取り組む姿勢を育成していく必要があることがうかがえる。

●「授業に集中して臨んでいる(本校88.2%、県平均91.4%)」「クラスは発言しやすい雰囲気である(本校74.2%、県平均81.7%)」「学級活動の時間などで、友人と話し合ってクラスのきまりなどを決めている(本校84.9%、県平均90.0%)」の項目は肯定的割合が低く、生徒が学習に臨む上での環境が十分でないと言える。

●家庭学習・自主学習に関する質問項目では、「家で学校の宿題をしている(本校の肯定的割合93.3%、県平均91.3%)」「家で自分でやるべきことを考えて勉強している(本校56.2、県平均55.7%)」の項目において肯定的割合が高くなっているが、「授業の予習・復習をしている」「テストのやり直しをしている」の項目は肯定的割合が低く、家庭学習の質的な向上を図る必要があることが読み取れる。また、「自分から進んで学習に取り組んでいる」「自ら計画を立て、自主的に勉強している」の項目が肯定的割合が低く、意義を自覚して家庭学習に取り組めていないことが読み取れる。「平日の家庭学習時間が1時間未満」という生徒が46.6%(県平均39.1%)、「休日の家庭学習時間が2時間未満」という生徒が75.3%(県平均68.7%)に上った。

●「1日の読書時間が10分以下である」という生徒が61.9%(県平均49.2%)いた。

○●「学習して身に付けたことは、将来の仕事や生活の中で役に立つと思う」の質問項目に関しては、肯定的割合が94.4%にのぼり、県平均89.7%を上回っている。その一方で、「将来の夢や目標をもっている」の項目は、肯定的割合が低い(本校68.0%、県平均70.7%)。学習は自分にとって大切なものであると考えながらも、将来に対するイメージや目標がもてないために、学習意欲の向上につながらないことがうかがえる。

○●「授業において目標・めあてが示されている(本校97.2%、県平均97.0%)」、「授業において学習内容を振り返る活動をよく行っている(本校80.9%、県平均81.4%)」の項目は肯定的割合が高く、県平均とほとんど変わらない。学習指導の課題として数年間にわたって共通理解を図ってきたことによる成果であるといえる。その一方で、「授業で話し合う活動を行っている」の肯定的割合が低い(本校89.3%、県平均95.5%)。

○●「毎日の生活が充実している」の質問に肯定的に回答した生徒は91.1%で、県平均(89.3%)を上回っている。また、「毎朝朝食を食べている」「早寝、早起きを心がけている」といった、心身の健康に関する回答は肯定的割合が高くなっており、本校教育の重点目標に関する諸施策の成果であると考えられる。一方、携帯電話やスマートフォンの使用時間は、県平均と比較してやや長くなっている。

学力向上に向けた学校全体での取組

★学校全体で、重点を置いて取り組んでいること

重点的な取組	取組の具体的な内容	取組に関わる調査結果
家庭学習の定着	・自主学習「チャレンジノート」の提出	・家庭学習は全般的に取り組む時間が短いほか、宿題をやるだけで終わってしまい、授業の予習・復習、テストの見直しなど、自らの現状を踏まえた上で効果的な方法を考えようとする意識が希薄であることがわかった。今後は、家庭学習の意義をとらえさせた上で、質の向上を図っていききたい。
学習に臨む姿勢に関する指導、学習環境の醸成	・授業の受け方や学習への取り組み方に対する継続的な指導	・学習に臨む意識付け、雰囲気づくりにおいては、課題が多く見られた。多くの生徒が授業に真剣に臨むことで、学習に対する自覚を高めさせ、更なる意欲向上を図っていく必要がある。また、発言しやすい雰囲気かどうかは、学習面にとどまらず学級生活そのものと関連が深い。互いに認め合い、高め合えるような集団づくりが望まれる。

★学校全体で、今後新たに重点を置いて取り組むこと

調査結果等に見られた課題	重点的な取組	取組の具体的な内容
・いずれの教科においても、中学1年後半以降の学習内容に理解が不十分な面が見られ、基礎的な用語を問う問題の正答率が低い。	・基礎的・基本的内容の更なる定着	・基礎的・基本的内容の定着を2学年の学習重点目標とし、各教科において授業で既習内容を復習する機会を設けたり、宿題や課題を出したりする。また、基礎的な内容については、小テストなどを行うことで着実な定着を図る。
・国語・英語をはじめ各教科において、書くことに対する苦手意識があり、正答率が低くなっている。	・書く活動の重点化	・自分の考えや意見を適切に伝えることができるよう、各教科において書いて表現する活動を取り入れていく。その際、書く上での視点を明確に与えたりすることで、表現力の向上を図る。また、書いた文章を互いに発表し合ったり、添削指導によってねらいが達成できていたか、どう改善すればよいかを指導していく。
・学習に対するおもしろさや必要性は自覚していながら、学習に対して意欲的に臨むことができていない。	・キャリア教育の充実	・自己理解を深めさせたり、卒業後の進路や職業について具体的に考えさせたりすることで、「学ぶのは生きていくため、幸福な生活を送るため」という意義を見いださせ、学習意欲の向上及び主体性の育成を図っていく。